思えば、東京

一路　真実

電車で小説を読むと、よく乗り過ごす。

何か考え事をしているときも、降りられない。気付いたら、高田馬場ではなく目白にいたり、気付いたら、乗り換えの飯田橋が通り過ぎて行ったりする。その日は行きも帰りも、顔を上げた瞬間に降りる駅が目の前にあった。

何だかそういうときはきまって降りたくなくて、できることなら小説を読み終えるまで座っていたくなってしまう。

エスカレーターの右側を人が走っていくときや、電車の中が満員で「みんなどこにそんな用事があるんだ」と思うとき、相手からぶつかってきたのに謝られないときなどは、

「なんで東京に来てしまったんだろう?」

と後悔する。そしてそのまま、東京の街を歩くことが嫌になってしまう。

東京に六年間住んでいた。東京は、カラフルだ。住む人によってどんな色にでも変化する。カラフルな蛇のようだ。

しかし、爬虫類は少々意思疎通が図りづらい。どれだけ一緒に暮らしても、いつの間にか勝手に逃げ出す。そして、六時のニュースで話題になる。

そうした事件が、実際に起こった。

逃げ出した蛇は、結局、高田馬場の公園で発見された。見つかってしまったら、爬虫類のくせして飼い主の腕にすり寄っていったという。

東京は、そんな街だ。

知り合いと飲んだ帰り、外で立ち話をしていると、

「みんなこうして東京にいるんだから、また集まりましょうよ。そのときには、私が作った野菜をみんなに配りますよ」

と言われた。

顔見知り程度の知り合いだったが、そう言われたときに気付いてしまった。飲んでいる最中に連絡先を交換したときよりも、その立ち話の方が私は何だか心地よかったのだ。どうせ連絡なんかしないのだろうと思いながら、番号を打ち込む作業は辛い。連絡先を知っているという安心感だけでは、人はつながっていけないことを知っているからだ。だからこそ、その一言が温かかった。インターネットやメールのみのバーチャルな関係ではなく、こうして東京に根付く人たちとつながっている。なんとなしにネットワークを広げ、自分も東京でやっていけていたのだな、と思う。

それだけではない。その後、みんなばらばらの方向に帰ることになって

思った。

その場にいる人々にそれぞれの月曜日が来るのだ。

そのことに対して、「あぁ、東京にいて良かったな」と思った。そういう一瞬の「あぁ」という気持ちを大切にしながら生きていきたい、と思った。

一年ぶりに東京へ旅行に出かけた。

昔住んでいた街を歩いていたとき、ふいに通りすがりの女性に道を尋ねられた。

「まっすぐ行って、左の坂を上がったところですよ」

そう教えて、再び歩き出すと笑いがこみ上げてきた。

私は旅行者だ。

でも、この街を知っている。

昔住んでいた街は、全然懐かしくなかった。むしろ、私はまだあそこにいるのだ。私の魂はあそこに居続けているのだ。過ぎていった日常や溢れ返った希望や叶わなかった想いがしこりのように生き続けている。

その感覚が、逆に私を自由にした。今のこの私は、どこにも縛られていない。今のこの私は、世界中の誰でもない。今、ここを歩いている一人の人間でしかないのだ。旅行者でも居住者でもない、一人の人間。

やっぱり意思疎通は図りづらい。

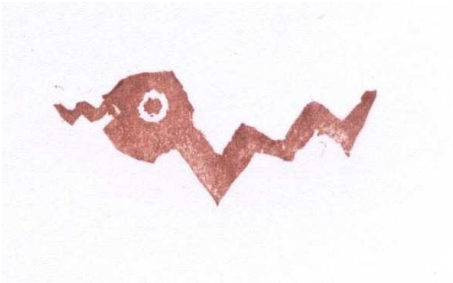
でも、何度逃げられてもいい。

噛まれたって構わない。

ようやく見つけた微妙な距離。

東京という蛇が、私の前でとぐろを巻いた。

（終）



〔絵・烏丸クルミ〕